

## 巻頭言 就任の御挨拶

大阪医科大学  
小児科学教室 教授  
芦田 明



平成31年4月1日付で小児科学教室教授に着任いたしました。一言ご挨拶申し上げます。

小児科学教室には、産婦人科と連携して超早産超低出生体重児の診療にあたる新生児グループ、腎炎・ネフローゼなどの内科的疾患ばかりでなく腎代替療法としての透析医療や腎移植後患児の管理などを行う腎臓グループ、てんかんなどの痙攣性疾患のみならず発達障害も扱う神経グループ、幼小児にも腹部超音波検査や上部・下部内視鏡を行う消化器病グループ、主に悪性腫瘍を扱う血液・腫瘍グループ、カテーテル検査やアブレーション治療を駆使するのみならず小児心臓・血管外科との協調により多くの外科的症例を扱う循環器グループ、専門グループとしては日本でまだ数少ない小児膠原病・アレルギーグループ、小児科では最も歴史があり糖尿病の患者会を有する内分泌グループ、小児の心の問題を自律神経調節とともに診療・研究する心身症グループがあり、小児疾患のほぼすべてをカバーするサブスペシャリティのグループを擁しており、日々子どもの健康を守るべく診療に従事しています。しかし、病気を抱えて来院する子どもは、臓器別・専門領域別に病状を訴えるわけではありません。子どもとはいえ常に一人の人間であり、一人の人間としての人権が尊重され、全人的な医療を提供することが我々小児科医には求められています。日本小児科学会が掲げる「小児科医は子供の総合診療医である」というスローガンにもあるように、各専門グループを有機的に連携させ、つねに患児を全人的・総合的に捉えることが必要であると考えます。

私は、昭和最後の年である昭和63年に本学を卒業しました。小児科での初期研修後、大学院生として本学医化学教室（現生化学教室）で実験の手ほどき受け、大学院修了後は本学小児科で幅広く小児科学の臨床研修を受けてきました。その中で小児腎臓病学を自分の専門領域として選び、病因・病態としての酸化ストレスの関与に注目しながら臨床および研究を行ってきました。小児科においても、患者さんの訴えを傾聴し的確な診断・治療に結び付けることは成人の内科と同様です。しかし、子どもは成人と異なり自分の症状を言葉でうまく表現できず、付き添いで来る両親をはじめとする第三者の大人からの情報と、診察時に見せる子どもの笑顔や泣き顔、泣き声や挙動の変化など、子どもの発する小さなサインからの確に所見をとる必要があります。私はこの子どもの発する小さなサインを見落とさず、的確に診断し、治療に結び付けることを目標に研鑽を積んでまいりました。

この度、平成から令和へと移る年に本学小児科学教室の教授を拝命いたしました。現在までの私のキャリアを生かし、小児を全人的に診ながらサブスペシャリティを極められるよう後進たちを指導することが第一の仕事であると考えます。平成の時代に私を教育してくれた大阪医科大学に少しでも恩返しができるように、新しい令和の時代の若い後輩の先生方とともに、楽しさと厳しさをもって臨床及び研究に邁進し、子どもたちの健康と健やかな成長に少しでも貢献でき、大阪医科大学小児科をさらに発展させられるよう精進してまいりたいと思います。

どうぞご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。